786　中央大学予科大会

〔『法学新報』第34巻2（385）号　大正13年2月5日〕

○中央大学予科大会　毎年秋季に於て開催さるる本学予科大会は昨秋は大震災により遂に其の機を得さりし所一月二十日午後零時半より本学新館一階の第拾号室に催されたり当日定刻に至らさるに続々予科学生は参集し遂に其の数五百名以上に及ひたれはさしもの会場も立錐の余地なき状態なりき予科三年の富田喜作氏開会の辞を述へ次いて堀科長簡単なる挨拶をなし大井

先生は其専攻学科の関係より説き起して英国司法官養成の方法に及ひ転して各高等学校学生修学の現状と其欠陥とを挙けて本学予科学生の覚醒を促され学生諸氏の幸福なる境遇と前途の洋々たるへきを祝さる次に二三学生の所感を述へつゝあるの時花井博士は繁忙なる時間を割きて会場に臨まれ学生の説く所を傾聴せられやかて幹事の懇請により壇上に立たれ本日は講話をなす予定に非ず唯臨場するのみなりしもこの壇上に立ては一層臨場の主旨か徹底すると思ひ立ちたる次第なりとて、

学生の演説を簡単に批評され『堀科長より予科入学者の年少者は十七、八歳と聞きましたか私かこの学校に入学致しましたのも丁度十八歳の時でありました。当時は昼間に東京英語学校が開かれて居り、夜間には同じ場所に英吉利法律学校が開かれて居りましたか其当時に於ても矢張り本日のやうな会合はよく開かれたのてありました』とて昔を偲はれ次に中央大学の学風につき質実剛健とは之を裏から云へは質実とは浮薄の反対てあり剛健とは優柔の反対てあるこの学風は独り中央大学の学風に止まらす凡そ学問を学ひ人格を修養せんとするには何人にも肝要なることなり中央大学の入学方針は人物本位なれはこの入学方針により入学せる学生はその根本方針を誤らぬやう益々奮発自重すへしと激励せられ最後に『世の中か段々難かしくなるにつけ帝国を荷つて立たんとする地位にある諸君はその責任か非常に重大てあります諸君か学問をなされ或は人格を修養するのは単に自分の為てはない実に国家のためなることを克く考へられると実に諸君の任務は重大なことてありますすここに於て何をする事か国家に尽す所以か深く考へなけれはならないと思ふこのやうな若い人々の処へ年寄か来て話をすることは矛盾てありませうか私は諸君の進まるへき広漠たる原野に一つの花を求めさせんか為にここに立つたのであります』

と結び降壇さる是より一同に茶菓、寿司を頒ち尚ほ学生十数氏の演説ありやかて余興に移り春風亭小柳枝の落語榎本芝水の薩摩琵琶、佐藤旭曄の筑前琵琶あり其の外学生の余興も催されたるも中田善次郎の琵琶鈴木英二の落語の如き堂に入れるの感ありき興未だ尽きさりしか後日に譲り予科三年の小田島清氏閉会の辞を述へ堀予科々長の発声にて中央大学の万歳を三唱して散会したる六時半なりき